

新約ギリシア語中級文法試(私)論(一)

——ダイナマンティとポーター——

伊 藤 明 生

はじめに

「原語で聖書を読みたい(読めるようになりたい)。」と希望と期待とで胸をいっぱいにした新入生たちの姿も五回ほど見てきた。しかし、そのほとんどが無残にも数ヶ月で希望も期待も打ち碎かれるのも見てきた。少なくともギリシア語に関しては、筆者は責任の一端を覚えざるをえない。なぜかギリシア語には語形変化が多く、なぜか日本語とは全く違う。勿論、このことについては筆者に責任はない。もっと学生にやさしい教え方もあるかもしれないが、基本はやはり語形変化を覚え、理解することだと思う。従って、初級文法(の学習法)について大改革を提唱する勇氣も能力も筆者にはない。メイチェン^①も万全ではないが、取って替わる教科書は容易に書けないと思う。むしろ、筆者の関心事は、苦勞して語形変化を覚えた上で一体、邦訳聖書にはない何を汲み取れるかの方にある。即ち、中級文法^②に他ならない。少なくとも最近までは、日本語では言うまでもなく、英語でも相応しい文法書が見当たらなかった。普通、ダイナマンティ^③が

用いられてきたが、必ずしも十分勧められるものとは言えなかった。近年、出版されたポーターの文法書^④は完璧とはいかないまでも、かなりいい線のものとな筆者は考えている。許されるならば、今後、この「基督神学」の紙面をお借りして、ポーターを参考にしながら、積義に役立つ文法論を学生、同窓生はじめ、その他諸氏のために展開したいと考えている。

今回は、手始めにデйнаマンティとポーターとを比較検討し、なぜポーターの方がデйнаマンティよりもお勧めできるかを以下に論じて置きたい。

デйнаマンティ

デйнаマンティの文法書の初版の出版は、何と一九二七年と記されている。これは実に驚くに価する。それほど古い文法書がいまだに出版され、使用されていることは信じ難い。新約ギリシア語文法の研究の遅れを如実に物語っている。しかも、この文法書は、大部のレファランス文法書のエッセンスをまとめる形をとっている（勿論、独自の貢献が全くない訳ではない）ので、実質的な執筆年代（即ち内容を裏付ける研究の年代）はもつと前に遡ることになる。大いにデйнаマンティで利用されているロバートソンの文法書（*Grammar of the Greek New Testament in the Light of Historical Research*）の初版出版は一九一四年と言う。また、J. H. Moulton の *A Grammar of New Testament Greek: Prolegomena*（第一巻）の初版は一九〇六年となっている。この一九世紀の終わりから二〇世紀初頭は、ギリシア語のパピルス文献が膨大な量で発見され、その成果が日の目を見た時期に他ならない^⑤。その意味では、新約ギリシア語文法の研究も画期的に発展したことは否めない。ところが、逆に現代の視点から見れば、デйнаマンティの文法書は近代言語学^⑥の成果の結集ではなく、文献学の研究の集大成とも言うべきものとなる。つまり、デйнаマンティには、近代言語

学的視点および、その研究成果は全く反映していない、と言ってよい。そして、このような文法書がまだ広範囲に用いられていることは、新約学（更には聖書学全体）で如何に言語学が無視されてきたか、を示している。^⑦この点は明らかにポーターの「イデオムズ」と比較してみても決定的な短所と言える。

デйна＝マンティは序文にもある通り^⑧、学生向けに書かれた正確で包括的文法の概要に他ならない。実際に、三六八頁に及ぶ、この文法書は第一部形態論、第二部統語論、そして第二部の統語論が名詞、動詞、文節と三分割され、最後に付録という構成になっている。導入部分では、インド・ヨーロッパ語族の説明に始まり、ギリシア語の歴史、新約ギリシア語の特徴が扱われている。第一部の形態論では、正書法に始まり、名詞、形容詞、動詞などの活用が説明されている。更に巻末の付録には、メイチェンの文法書にあるような動詞、名詞、形容詞などの活用表があり、不規則動詞の基本型の一覧表まで付いている。ギリシア語作文練習問題もある。実に至れり尽くせり、という感じがある。従って、当然のことながら、個々の項目、事柄の取り扱いが概略的なものとなっている。しかし、概略的でも、あくまでも完全なレファランスマニュアルのエッセンスを教科書的に提示している。明らかに、この辺にデйна＝マンティの強味があり、同時にこれが弱点に他ならない。

ポーターの「イデオムズ」

ポーターの「イデオムズ」は、様々な面でデйна＝マンティと対照的と言える。先ず、利用者（読者層）が明確に設定されている。ほぼ一年間新約ギリシア語を勉強した者を想定しており、ポーターが実際にバイオラ大学で二年目のギリシア語のクラスを教えながら作成した教材に他ならない。^⑨従って、デйна＝マンティのような包括的な文法書ではない。ギリシア語の歴史あるいは形態論には一切紙面が費やされていない。

これはポーターの賢い判断であったと筆者は考える。勿論、新約ギリシア語を学ぶにあたり、多少なりともギリシア語の歴史を知っているのは有益と思う。しかし、ギリシア語の歴史について知りたい時には、別の書物に当たればよい。中級文法書で必要不可欠な内容ではない。また、形態論を取り扱う必然性もない。既に形態論の基礎を学んだ学生が中級文法書を読むことが前提とされている。初級文法書と内容的に重複する必要はない。

やはり、ポーターの「イデオムズ」の独自性は、近代言語学の研究成果を土台にしていることと言える。ポーター自身、他の同類の文法書と比較して自分のものがすぐれている点として、先ずこのことを挙げている^⑩。それでは、近代言語学の原理に基づくと、一体何が異なってくるのか。デйнаマンティが土台としている文献学と較べて一番顕著なのは、新約ギリシア語へ共時的にアプローチしていることと言える。デйнаマンティは、他の同類の文法書およびレファランス文法書と同様に通時的アプローチの色彩が濃い。デйнаマンティは、個々の項目で必ず、その起源を先ず扱っている。例えば、前置詞の起源、形容詞の起源、冠詞の起源などと。誤解を避けるために付言しておくが、ポーターも起源や歴史の問題を完全に無視している訳ではない。ただ、デйнаマンティとの大きな相違として、起源や歴史的な事柄が新約聖書での用法や意味を規定していないことをポーターは強く意識している。古典ギリシア語やラテン語と比較検討して、新約ギリシア語を論じていない。あくまでも、新約聖書の言語を、一世紀の人々が使用していた言語として、一つの完結した言語体系として扱っている^⑪。

このあたりの相違は、格の取り扱いにも明らかになっている。デйнаマンティでは、格は八つとして扱われている。メイチェンでは主格、属格、与格、対格、呼格の五格を学ぶが、デйнаマンティでは、属格が属格（純粹属格）と奪格（奪格的属格）とに分けられ、与格が与格（純粹与格）、位格（位置的与格）、具

格（手段の与格）の三つに分けて扱われている¹²⁾。ギリシア語に元来八格があったと結論付ける根拠が二つ挙げられている¹³⁾。一つは文献学あるいは比較言語学の成果に他ならない。ギリシア語は、インド・ヨーロッパ語族に属するが、その祖語にもっとも近いとされるサンスクリット語には格が八つある。そして、サンスクリット語の八格に照らしてギリシア語の格を研究すると、同様の区別が見つけられた、と言う。従って、デイナールマンティイは、ギリシア語に八格あるとの認識は「比較文献学の堅実な方法」に基づいていると主張している。もう一つの理由は、格とは形態論の問題ではなく、機能の問題であるから、と言う。一番目の、サンスクリット語の格の数と新約ギリシア語の格の数とを結び付ける、論理的必然性は乏しいように思われる。たとい、この通時（歴史）的議論が正しいとしても、二つめの理由も少々怪しい。格が形態の問題ではなく、機能というののはわかるが、格の数を八とする根拠は、格の機能からは直接に導き出すことはできない。格を機能として理解し、あくまでも機能の数と同じ数の格を想定するならば、八では少なすぎる。実際、デイナールマンティイでさえ、八格を更に細分化している。主格は、(1)主語主格、(2)述語主格、(3)名称の主格、(4)自立主格、(5)感嘆の主格に、属格（純粹属格）は、(1)描写の属格、(2)所有の属格、(3)関係の属格、(4)副詞的属格、(5)行為を表現する名詞と共に使われる属格、(6)同格の属格、(7)部分を示す属格、(8)独立属格に、奪格（奪格的属格）は、(1)分離の奪格、(2)出処の奪格、(3)手段の奪格、(4)比較の奪格に分けられている¹⁴⁾。もし、格が機能であることに固執するならば、極端に言えば、この細分化したものを格として理解しなければならぬとも言える。換言すれば、格の数を八と規定して取り扱うのは、あくまでも通時的考察に基づき、インド・ヨーロッパ語族の祖語にサンスクリット語が類似していたという推定によることがわかる。従って、新約ギリシア語の格を一つの体系として扱うのであれば、五格で取り扱うので問題はないし、それが適切な方法と思われる。そして、これがポーターの見解でもある¹⁵⁾。そして、このような相違は、比較文献学と近代

言語学の相違に他ならない。

「イデオムズ」の他の特徴としては、語順と構文、そして談話分析のためにそれぞれ章が設けられていることが挙げられる。勿論デイナーマンティでは全く取り挙げられていない内容に他ならない。ある意味で「イデオムズ」は、最後の談話分析を常に視野に入れて書かれた文法書と言うこともできる。この関連で、興味深いことに、ポーターは文節およびそれ以上の単位に、従来の文法書よりも明らかにより多くの注意を払っている。単語と語句（フレーズ）に二〇〇頁弱の紙面を費やしているのに対して、文節（クローズ）以上の単位には八〇頁ほどの紙面を費やしている。因みに、デイナーマンティでは、第一部の形態論が三〇頁以上、第二部の統語論全体が二五〇頁ほどで、そのうち名詞に九〇頁程度、動詞に一〇〇頁弱、文節には僅か四〇頁弱の紙面しか費やしていない。デイナーマンティと比較すれば、「イデオムズ」全体の紙面の配分自体、独特なものと言える。勿論「イデオムズ」にしても、語順や談話分析等の取り扱いが充分なものとは決して言えないが、紙面の制約上、致し方ないことかもしれない。また、「イデオムズ」では、このように新しい内容に紙面を提供するだけではなく、伝統的な事柄についてもポーターは自分独自の見解を加えている。しかも、自分と異なる理解や考え方も無視することなく、公平に提示している。ポーター自身によれば、¹⁶⁾独自の見解を加え、議論を前進させた、と意識しているものとして、以下の章がある。時制とアスペクトの第一章、法と姿勢の第二章、格と性の第四章、前置詞の第九章、分詞の第一章、条件文(節)の第六章、語順と構文の第二〇章、談話分析の第二二章となる。四章の格の取り扱いについては既にデイナーマンティの扱い方と比較した。九章の前置詞の扱い方での独自性は、視覚に訴えるダイヤグラムにもあるが、どの前置詞とどの前置詞とが反意語か、また類義の前置詞間の微妙な相違に注意を促している。このへんには、やはり近代言語学の視点が反映している。一〇章の分詞では、特に分詞の時制の問題について独自の見

解が認められる。一六章の条件文(節)では、様々の条件の分類が、伝統的な分類の枠組みに捕らわれずに提示されている。

勿論、ポーターの記述の中で最も注目に値するのは、一章の時制とアスペクトに他ならない。参考文献表と索引までも含めると、何と六〇〇頁に近い大部の論文をポーターが、この問題について書いている¹⁷⁾ので当然なことと思う。前置詞を扱ってある九章(四二頁)を除くと、「イデオムズ」が一番長い章は、時制とアスペクトの一章に他ならない(三〇頁)。デイナールマンティやメイチェンを始め、ほとんどすべての文法書では、新約ギリシア語の時制は Aktionsart (行動の種類)として理解されている。例えば、デイナールマンティでは、現在時制は連続的行動、完了時制は完成した行動、不定過去時制は不定の行動を表現する、と説明されている(一七八頁)。また、別の表現では行動を点として、点的な行動として把握するか、あるいは進行中、即ち線の行動とみなすか二つの根本的な見方があるとする¹⁸⁾(一七九頁)。そして、このような行動の種類 (Aktionsart) が主要な概念で、過去・現在・未来という時間概念は新約ギリシア語の時制では重要でない、とする(一七七頁)。これが、ほぼ伝統的で標準的なギリシア語時制の理解に他ならない¹⁹⁾。

ポーターは、このような伝統的な理解を否定する。新約ギリシア語の時制は、過去・現在・未来という時間概念でもなく、どのように行動(あるいは出来事)が客観的に起るかという Aktionsart でもない。どちらでもなく、アスペクトに他ならない、と論じている。ポーターによると、「動詞のアスペクトを定義すると、話し手なり書き手が、動詞体系の中の特定の時制形を選んで、行動の見方を文法化する(即ち、語形を選んで意味を表現する)意味論上のカテゴリーとなる²⁰⁾。」そして、具体的には三つの動詞のアスペクトを規定している。即ち、完了的アスペクト、未完了的アスペクト、静的アスペクトの三つとする。それぞれのアスペクトは主要な時制と結び付けられている。完了的アスペクトは、不定過去時制の意味と、未完了的ア

ペクトは現在時制と未完了過去時制の意味、静的アスペクトは完了時制と大完了時制の意味とする。換言すると、完了的アスペクトでは、行動を言語使用者が、完成し区別されない過程として表現する。そして、未完了的アスペクトでは、行動を言語使用者が進行中として表わし、静的アスペクトでは、言語使用者が行動を所与の（しかし、しばしば複雑な）事態を反映しているものとして表わしている。いずれも、行動（あるいは出来事）が実際に、どのように起こったかではなく、言語使用者が、どのように見、表現しているかと関係がある。²¹⁾

ポーターは同じ事を様々な形で説明している。不定過去時制に代表される完了的アスペクトは背景的時制、現在時制に代表される未完了的アスペクトは前景的時制、完了時制に代表される静的アスペクトは前線の時制と呼べる。更にポーターは、使徒の働き一六・一―五を例として取り挙げている。不定過去時制（背景的アスペクト）は、出来事の基本的枠組みを確立する（即ち、ナレーションの部分）のに用いられている。「それからパウロは……行った (κατηντην)。」ところが、「テモテという弟子がいた (ἦν)。」と新しい登場人物の紹介には未完了過去時制、即ち未完了的アスペクトが使われている。更に彼の特徴、「評判がよい (εὐαγγελίον)」にも強調があり、未完了的アスペクト（未完了過去時制）が用いられている。背景的な事柄が続いているが、背景的時制である不定過去時制で語られている (ἦεν ἄνθρωποι … ἐξελθόντες … λαβάντες … πρεσβύτερον)。ところが、テモテが割礼を受ける理由は、前景的時制（未完了過去）に補助されながら、前線的時制（大完了）で提示されている。「彼の父がギリシア人である (ἦν Ἰσραηλῆν, 未完了過去時制) ことを、みなが知っていた (ἦεν ἴσταν, 大完了時制) 静的アスペクト」からである。「教理に拘ることが、この文脈では大切と言える。従って、四節では、前景的時制（未完了的アスペクト）が使用され (ἠκούσαντο … ἀπεδίδοντο … ἀναδραστησάντες … ἀναδραστησάντες)」、決定的な部分とも言うべきエルサレム会議の議決については前線の時制（静的

アスペクト)の完了時制が用いられている(κεκμηνα)²²⁾。そして、このパラグラフの結果部分が、再び前景的時制(未完了過去時制)で語られ(ἐστρεφούντ... ἐπιπλοεούν...)、六節に行くともう一度、背景的時制で叙述が続けられている(σὶν ἡβού)²³⁾。

別の例としては、ローマ書五・一―二が取り挙げられている。「信仰によって義と認められた(不定過去時制)私たちは、私たちの主イエス・キリストによって、神との平和を持つています(現在時制)。」という前提で始まっている。信仰義認が背景となつて、神との平和を持つことが前面に目立っている。そして、二節ではパウロは、もつと力強く、読者が享受している身分を前面に出している。「またキリストによって、いま私たちの立っている(完了時制∥靜的アスペクト)この恵みに信仰によって導き入れられた(完了時制∥靜的アスペクト)私たちは、神の栄光を望んで大いに喜んでいきます。」と²⁴⁾。

このようなギリシア語動詞の時制理解に対して既に様々な反応が起こっている。興味深いことに、同じように動詞のアスペクトから新約ギリシア語の動詞の時制にアプローチしているファンニングは、ポーターと完全に同じ見解ではない²⁵⁾。動詞のアスペクトの定義など基本的事柄については一致している。しかし、新約ギリシア語の時制に過去・現在・未来という時間的要素が多少なりとも含まれるか否か、あるいは言語使用者の(主観的な)見方とは別に、行動(あるいは出来事)の(客観的な)起こり方そのものが時制の意味に拘っているか否か等について二人は意見を異にしている。二人共、時制の意味で時間よりもアスペクトが重要とする点では一致している。ポーターは、新約ギリシア語の時制に時間的要素を全く認めようとするのが、ファンニングは時間的要素を多少なりとも認める。また、ファンニングは、行動の起こり方を明確にするヴェンドラー・ケニーの分類学を用い、いわばアスペクトとAktionsartとを組み合わせようとしているのに対し、ポーターは、そのようなアプローチは一貫性に欠けると批判している。ポーターはあくまでも純粹に言語学

的にアプローチし、しかも例外を極力排除する努力を積み重ねている。他方、ファニングは聖書釈義に有用な時制論を目指して、哲学的な見方も織り混せている。この辺の出発点や目指す所の相違が結局、両者の見解の相違となつていふように思われる。時制とアスペクトの問題の詳細は次回に譲るが、このような時制理解が二年めの新約ギリシア語学習者を対象とする中級文法書に提示されていることにも「イデオムズ」の意義や重要さを垣間見ることが出来る。

結 論

ロバートソンが書いている通りに²⁶、完璧な文法あるいは文法書というものは不可能なものに他ならない。しかし、ポーターの「イデオムズ」が如何に画期的なものかは、以上で十分おわかり頂けたことと思う。二年めの新約ギリシア語学習者を念頭に置いた中級文法書でありながら、近代言語学の原理に基づいているものを寡聞にして筆者は知らない。ポーターの「イデオムズ」は、既に中級文法をある程度習得した方々にとつても有益なものに違いない。ぜひ一読をお勧めしたい。

次回からは、ポーターの「イデオムズ」などを参考にしながら、「中級文法試(私)論」として、各文法事項を取り挙げて論じる予定でいる。先ず今回は、時制論および動詞のアスペクトに取り組みたい。

注

① J. G. Machen 著、田辺滋訳、「新約聖書ギリシヤ語原典入門」ニューライフ出版社、一九六七年。

② ハリデー、ミッド中級文法とは、F. Blass and A. Debrunner 著、Robert W. Funk 編訳、*A Greek Grammar of the New Testament* (The University of Chicago Press, 1961); A. T. Robertson 著、*A Grammar of the Greek New Testament in*

the Light of Historical Research (Broadman Press, 1934) 初版は一九一四、J. H. Moulton, *A Grammar of New Testament Greek* (T. & T. Clark, 第一巻一九〇六、第二巻一九二〇、第三巻一九六三、第四巻一九七六) などのレファランスマ法書ではなく、初級文法習得後、講読・釈義などの際に用いる文法書を指す。

③ H. E. Dana and J. R. Mantey 著 *A Manual Grammar of the Greek New Testament* (Macmillan, 1957) 初版は一九二七。

④ S. E. Porter 著 *Idioms of the Greek New Testament* (SOT Press, 1992)。以下「イディオムズ」と略す。誤解を招き易く、この書の題は C. F. D. Moule 著 *An Idiom-Book of New Testament Greek* (Cambridge University Press, 1953) によっている(「イディオムズ」一三三頁)。

⑤ この点で大きな貢献のあった人物が Adolf Deissmann (*Light from the Ancient East* [Baker, 1978])。ただし原書初版は一九〇八年、英書の初版は一九二七年) や J. H. Moulton に他ならぬ。

⑥ スイスの言語学者フェルディナン・ド・ソシュール(一八五七—一九一三)に近代言語学は始まる、と普通言われる。風間喜代三著、「言語学の誕生」(岩波新書、一九七八)はソシュールで終わり、田中克彦著「言語学とは何か」(岩波新書、一九九三)では、ソシュールに始まる言語学の流れが扱われている。ソシュールの死後、弟子達が編集した「一般言語学講義」は一九一六年に出版された。

⑦ 勿論、徐々には是正されつつある。近代言語学の成果を取り入れているものとして、次のようなものを挙げることが出来る。

James Barr 著 *The Semantics of Biblical Language* (Oxford University Press, 1961), A. C. Thiselton 著 "Semantics and New Testament Interpretation" in: I. H. Marshall 編 *New Testament Interpretation* 改訂版 (Paternoster, 1979) 七五—一〇四頁、A. C. Thiselton 著 *The Two Horizons* (Eerdmans/Paternoster, 1980) 一一五—一三九頁、J. P. Louw 著 *Semantics of New Testament Greek* (Scholars Press, 1982)、Moisés Silva 著 *Biblical Words and Their*

また、D. A. Carson は *Themelios* (vol. 19 No. 3 1994 p.21) の「イデオムズ」の書評で次のように記している。⁹ … But although this is a second-year grammar, it is by far the most innovative and contemporary work of its kind to appear for a long time. …

… It is because this grammar is the first at this level to be built on a competent grasp of modern linguistic theory… (「……ところが、これは二年めのための文法書ではあるが、この種の文法書としては長年書かれたことがない程、はるかに革新的で時代にマッチしたものである。……それは、この文法書が、このレベルのものとしては初めて、近代言語学理論を十分に理解して書かれているからである。……」)

⑪ 白状しておくが、筆者はあくまでも言語学の門外漢に過ぎない。言語学に対する誤解や認識不足は多々あることと思う。ご指摘、ご訂正下されば幸いと思う。

通常言われる、ソシユールの貢献は、大きく三つの点を挙げることができる。一つめとしては、言語と意味、とりわけ単語（記号）と、その指し示す対象物との関係は、あくまでも恣意的なものであつて、論理的必然性はない。即ち、言語使用共同体の習慣の結果に他ならない。二つめとしては、言語とは相互に依存している体系であり、例えば単語の意味とは類義語との相違や反意語の特定によって明らかになる。この二つの点から、必然的に言語の通時（歴史）的研究よりも、共時的研究の方が強調され、重要視されることになる。三つめとしては、実際に用いられる言語（パロール）と実際の言語の土台となる抽象的な体系（ラング）とを区別する。

⑫ デイナIIマンティ 六五―九五頁。

⑬ デイナIIマンティ 六五頁。

⑭ 更に、与格（純粹与格）は、(1)間接目的語の与格、(2)利害の与格、(3)所有の与格、(4)言及の与格に、位格

(位置的与格) は、(1)場所の位格、(2)時の位格、(3)領域の位格に、具格(手段の与格) は、(1)手段の具格、(2)原因の具格、(3)方法の具格、(4)尺度の具格、(5)結合の具格、(6)行為者の具格に、対格は、(1)直接目的語の対格、(2)副詞的対格、(3)同族対格、(4)二重対格、(5)独立対格、(6)誓いに使われる対格に、それぞれ細分化されている。呼格の細分化はない。

⑮「イディオムズ」八一頁: 'Formal synchronic criteria (i. e. treatment of the Greek language as used during the Hellenistic period, especially as it is found in the Greek of the NT) dictate that analysis begin with at most five cases.' (「共時的形の基準に従えば(即ち、ヘレニズム時代に用いられたギリシア語、とりわけ新約聖書のギリシア語に見られるままを取り扱えば)、分析は、せいぜい多くて五格から始まらなければならぬ。」)

⑯「イディオムズ」一六頁。

⑰ S. E. Porter, *Verbal Aspect*. 詳細は注⑦を参照のこと。

⑱ 実は、「見方」、「把握する」、「みなす」と表現してしまふと、Aktionsartではなく、アスペクトになってしまうが、多くの文法書では両者の間の区別は、あいまいになつてしまつている。

⑲ 実際、デイナーマンティは、ロバートソンやモールトンへの依存を明確にしている。

⑳ 「イディオムズ」二〇—二二頁: '... verbal aspect is defined as a semantic (meaning) category by which a speaker or writer grammaticalizes (i. e. represents a meaning by choice of a word-form) a perspective on an action by the selection of a particular tense-form in the verbal system.'

Fanning の定義と同様なもののよなつてゐる (*Verbal Aspect* 八四—八五頁)。

'Verbal aspect in NT Greek is that category in the grammar of the verb which reflects the focus or viewpoint of the speaker in regard to the action or condition which the verb describes. It shows the perspective from which the

occurrence is regarded or the portrayal of the occurrence apart from the actual or perceived nature of the situation itself.」(「新約ギリシア語の動詞のアスペクトとは、動詞が描写する行動や状態に関する話し手の焦点または視点を反映させる動詞の文法におけるカテゴリーである。実際あるいは理解されている状況の性質自体とは別の、出来事の描写あるいは、出来事を見る視点を示すものである。」)

②1 以上、「イデオムズ」二二―二二頁。

②2 「イデオムズ」二三頁で τα κεκρυμένα の訳が 'hidden things' となっているが、勿論 'determined' あるいは 'decided' の誤りと思われる。一九九四年第二版では 'determined' となっている。

②3 以上、「イデオムズ」二三頁および 'Keeping up with' 二〇五頁による。

②4 「イデオムズ」二三頁による。

②5 二人の議論は、カーソンによる紹介とともに Porter and Carson 編 'Biblical Greek language' (詳細は注⑦を参照のこと)。一八一―六二頁にある。他の学者達の反応は六二―八二頁にある。ポーターの Verbal Aspect への他の反応としては K. L. McKay, 'Time and Aspect in New Testament Greek' *Novum Testamentum* 34 (1992) 二〇九―二二八頁がある。

②6 A. T. Robertson, *A Grammar of the Greek New Testament* (詳細は注②) 三三頁・It is not possible then to write the final grammar of Greek either ancient or modern. The modern is constantly changing and we are ever learning more of the old. (「古代のであれ、現代のであれ、ギリシア語の最終的文法書を書くのは不可能である。現代ギリシア語は常に変化し続けているし、古代のギリシア語は私たちが常に学び続けているから。」)

※ポーター著「イデオムズ」購入希望者は、神学校伊藤までご連絡下さい。(新約学・教師)